
フランス整形外科を訪ねて

整形外科学教室 助教 大槻 周平 (平成10年入局)

皆さんは、フランスに対してどういったイメージをお持ちでしょうか？ 気難しく頑固でこだわりのあるややこしめの性格。女性はおしゃれだが気位が高く鼻にかかった感じ、でも、歴史があり少し日本とも似ているような……。

2013年6月、日仏整形外科合同会議が京都で行われました。そこで、日仏整形外科学会書記をされている藤原憲太先生からの勧めもあり発表を行いました。内容は膝蓋骨不安定症に対する手術療法でした。じつは、この膝蓋骨周辺の領域はリヨンのTrillat先生をはじめとして多くのフランス整形外科医が1940年頃より病態や手術を報告された領域でいわばフランス人こだわりの分野です。発表直前に藤原先生から「ちょっとややこしい質問されるかもね (ニヤリ)。」的なアドバイスを受け、英語で発表しましたが、その後は、フランス整形外科重鎮から「なぜ私が発表した測定法を用いて報告しない？ (Caton先生)」などご指導を受けた事は言うまでもありません。変な汗をかきながらもなんとかきりぬけ、同じリヨンから来られた座長のNeyret先生とお話する機会もあり、リヨン大学 (いわゆるリヨンスクールと言われています) を見学させていただく流れとなっていました。

日仏整形外科交換研修制度に応募して2014年4月からフランスへ訪問することとなりました。私の訪問先は、リヨンはもちろんとして膝関節鏡を用いた半月板 (meniscus) 縫合や靭帯再建にも興味がありますので、「The Meniscus」の著者 Beaufils 先生にコンタクトをとってパリのベルサイユ病院を訪問する事としました。また、私が大学院生時代からはじめた軟骨研究の主な学会である OARSI (国際関節

病学会) もパリで開催されましたので、その時期を挟むように予定を立てました。余談ですが、この研修に参加しようと思ったときは一人で行く予定だったのですが、妻に報告したところ「わかった、パリ行くわ!」と言われました。あれ、2歳半と5ヵ月 (話したときはまだ生後間無し!) 連れて行くってこと??? ひとりでふらりと行こうかと思っていたのに、これでは移動も何もかも計画を立て直さなければ……。みなさん、思っているより大変ですよー。荷物は3倍以上。食事の事もあり、ホテルも台所があるようなアパートタイプ、移動は基本レンタカー。責任も4倍、しかしきっと楽しみ喜びも4倍以上のはず……。

Prof. Philippe Beaufils

ようやく、フランス整形外科のお話です。

まず一つ目の訪問先病院はベルサイユ病院です。パリの中心地から車で20分程の離れた郊外にある病院でまさに、ベルサイユ宮殿の近くです。Beaufils先生からは到着の翌朝8時に病院7階の自分の部屋に来るようにとメールで言われていたのでフランス語のしゃべれない私はDr.Beaufils? Orthopaedic? など病院内で連呼しながら親切なフランス人に案内されて到着できました。Beaufils先生とは初対面だったのですが、訪問を大変喜んでいただけました。しかしながら、先生は62歳で30年くらいこの病院で働いておられますが、しばらく滞在するような日本からの訪問は私をはじめとらしく、「なんで君はこの病院を選んだんだい?」というのが最初の質問でした。即座に彼の著書「The Meniscus」を見せて、勉強しにきた事を伝えるとようやく、ニコッとされ、日本からの珍訪問者? に納得されたようです。

病院は毎朝8時からカンファレンス。金曜日は

big meeting day で来週の予定手術を一通り検討します（約2時間）。その他の日は前日に救急で運ばれた症例および緊急手術の報告などでした（約30分）。私はBeaufils先生の隣にいつも座り、症例ごとに君ならどうする？と聞かれましたので、気が抜けず結構疲れました。8割くらいは治療方針が日本と同じでした。膝に関しては、人工関節単顆置換術の適応が広く、脛骨骨切り術の適応が狭い印象でした。カンファレンスはもちろんフランス語ですが、金曜だけは私のために英語で皆さんがプレゼンをしてくださいました。あとのcafé timeでは、お前が来たから英語の準備でこっちは大変やぞーなんて、fellowたちから冗談で言われたりしましたが。ちなみにフランスの英語事情ですが、日本以上に話せないです（たぶん、なんでフランス人が英語話さなあかんの？という感覚でしょうか？）。アメリカに留学した時より、お互い英語がsecond languageなので意図が伝わり難いときもなんとなく気が楽でした。金曜のカンファレンス後は、私のためにBeaufils先生は半月板縫合術の適応とその手術成績、人工半月板治療の短期成績など学生も交えて講義してくださいました。そのなかで、半月板縫合は50歳くらいまでが適応と言われましたので、「先生自身ももし運動中に半月板損傷を起こしたら、私は先生の半月板を部分切除したらいいですね？」と冗談半分で質問したら、変性の程度にもよるが基本的には縫合してくれと言っておられました（笑）。

手術は3部屋を使って毎日朝8時半すぎからスタートでした。週に50件、年間3000件くらい行っ



写真1. Dr.Beaufils（右から二人目）とベルサイユ病院メンバー



写真2. Versailles hospital カンファレンス風景



写真3. Dr. Ali



写真4. fellowたち

ているようです。午前は、医学部生（4年）が手術に優先して入るので外からの見学でしたが、午後からは、手洗いをして関節鏡やTHAなど普通に介助させてもらえました（最後の方は、けっこう症例数が多くてお腹いっぱい状態でした）。Dr. Ali（若手整形外科医）が最初の1週間いろいろと教えてくれたおかげで、すぐにとけ込む事ができ、学生、interne、fellowなどさまざまな段階の医師との交流も非常に興味深いものでした。我々の大学では学生はある意味お客さんですが、フランスでは十分な戦力です。学生と二人で手術する事や、外来の手伝いなど当たり前です。その流れで、遅い昼食を共にし、

他の先生との交流も自然な流れでできていると感じました。学生さんには大変かもしれませんが、整形外科を身近に感じてもらうためにはいい事かなとも思いました。昼食時にワイン、ビールなどは自己責任でたしなまれてました（笑）。私は……内緒です。

OARSI meeting in Paris

私は、大学院4年生からアメリカのSan Diegoに留学し、軟骨の研究をしていました。それ以来、この学会には発表も含めて毎年参加しています。今年は、同門の長谷川先生がyoung investigators awardsに選ばれました。長谷川先生は私が留学したあとを引き継いでくださり、その後ご自身の研究を発展させられすばらしい結果を残されました。また、今年から助教として活躍中の星山先生も来られました。彼は、軟骨の研究を私の拙い指導のもとで腐らず続けてくれました。論文も現在 revise 中ですが、同門会誌発刊のころにはきっと採用されるでしょう。このように大阪医大でも基礎研究分野で若い芽が次々に育っており、留学中の友人や指導くださったMartin教授とも旧交を温める事ができました。今後も臨床と基礎の間でこれからも頑張っていくと感じた期間でした。

Prof. Olivier Guyen

リヨンに到着する前に次の病院へ確認メールをしたらNeyret先生は出張で翌週から病院に戻るが、他のメンバーがしっかりしてるから大丈夫だよと。なんだよー、せっかくきたのにどうしようかな？ まあ、とりあえずいっとくかなー？ でも誰の手術見るんやろ？ なんて考えていたら、日仏学会のメンバーであるGuyen先生からも別のメールが。明日、うちの病院に来い、お前のためにいろいろ手術 setting したからと。これまで全然連絡くれてなかったのに無茶やなー、なんて思いながら「まあええか、これも何かの流れだな。」と思い、急遽訪問先をHopital Edward Herriot追加させていただく事としました。

Guyen先生は国際的な感覚をもたれた近代的な先生で、日本にもたくさんお知り合いがおられ、非



写真 5. Dr. Oliver Guyen と

常に腰が低く優しい先生だなどの印象を持ちました。挨拶も程々に手術室へ。行ってみると3部屋のみだったので、まあ中規模の病院か？ なんて思いながら軽く病院の規模を聞いてみたらbig sizeだと？ この病院は地下鉄の駅前にあり整形外科建物まで10分程歩いたのですが、この建物にたどり着くまで、実は20以上のパビリオンがありました。それら全部が病院の敷地内で、それぞれの専門科ごとに建物が違うとの事でした。ちなみに整形外科内でも脊椎と、上肢外傷、下肢外傷で3つに分かれているとの事でした。手術は高位脛骨骨切り術、TKA revision、THA dual cupなどを見せていただきました。また、Guyen先生のお計らいで、フランス整形外科機器メーカーであるAmplitudeに訪問させていただく機会を得ました。研究開発レベルから、3Dプリンターを活用した患者さんオーダーメイドに骨切りガイド（PSI）の作成など興味深い経験となりました。最終日には日本とのLive Surgeryにも参加させていただき非常に貴重な経験をさせていただきました。

Prof. Philippe Neyret

ようやく、待ちに待ったNeyret先生の病院へ訪問となりました。Neyret先生は2015年ISAKOSの会長をされ、国際的に著名な先生でこれまで毎年のように日本からもフェローが訪問しています。外来、手術と見学させていただきました。外来は2部屋、それぞれに秘書さん、interneが診察の準備をします。患者さんはズボンをすでに脱いだ状態でベッドに横たわって診察を待っています。Neyret先生はそ

の2部屋を行ったり来たりされ、午前中で35名もの診察を急ぐ事なく行っておられました。我々と異なり、カルテに記入する事も検査オーダーする事も自分ではなくていいので、一人にかかる診察は短時間ですが患者さんとお話を十分に診察されます。その内容を秘書さんがカルテに記入、interneが検査オーダー、術後の臨床成績はinterneがすでに確認済みと、合理的に確立されており、無駄が無いとの印象でした。しかし自分に置き換えてみた場合、近隣の整形外科開業の先生からたくさんの患者さんを紹介してもらえそうな質の高い医療を実践して続けていかないと、このような状況を作る事も不可能だな、と感じました。いつになるかわかりませんが、良いものはどんどん吸収して今後の日本における診療に取り入れていきたいです。

今回、手術見学をしていても感じた事ですが、日本で使用できるインプラントや手術手技関連機器は非常に限られたものでした。それらの開発企業に日本への導入を訪ねると、必ず日本は厚労省や臨床試験のハードルが高すぎると言う返事でした。例えば、半月板の治療ですが、日本では部分切除もしくは縫合術しか選択はありませんが、ヨーロッパでは加えて、scaffold、半月板インプラント、allograftなど患者さんの状況でさまざまな選択肢があり、それぞれ中期成績などがすでに報告されています。この現状では、日本の医療は世界から置いていかれるのではと危機感を抱きました。日仏整形外科が構築した友好関係をもとに今後は医師の交換研修のみでなく、新規手術機器導入などフランスを窓口積極的に進めるようなシステムが構築されれば患者さんの治療選択の幅を広げる意味でも良いと考えます。

最後に

フランスへの印象は今となっては、180度変わりました。ディスカッションは日本人が嫌う衝突や上下関係による遠慮などあまりなく、良い質問をする若手には握手を求めるような許容がありました。気難しく頑固でややこしいといった印象は、納得するまでディスカッションを行う気概と、プロとしての



写真6. 手術風景



写真7. 患者さんオーダーメイドの人工関節骨切りガイド

プライドへ、気高く鼻にかかったお高い感じは、どの年代の方もおしゃれで、雨の日でもレインコートを楽しむような心の豊かさへと。

ミシュランの3つ星を40年以上維持しているリヨンの料理人ポール・ボキューズは1970年代に来日して懐石料理、京料理の料理法や盛りつけを参考にし、それまでの伝統的なフランス料理にモダンな変化を加えたと言われています。フランス整形外科も同様に、温故知新を実践しているというのが私の感想です。今回できた友情や知人を大切にしながら日本の整形外科医療向上のために少しでも還元できればと考えています。このような機会を与えていただきサポート下さった医局、同門の先生方、そして家族に心から感謝します。



写真8. 休日のリヨン（朝市：マルシェ）